

後藤新平筆「自治三訣」

(管理者：龍ヶ崎市立龍ヶ崎小学校
所在地：龍ヶ崎市 3316 番地)

後藤新平は、水沢藩(岩手県)藩士の後藤実崇の長男で、福島県須賀川医学校に学び、外科医となったのを皮切りに、愛知医学校長兼愛知病院長、内務省衛生局長、台湾総督府民生局長、南満州鉄道株式会社総裁、通信大臣、鉄道院総裁、内務大臣、外務大臣、東京市長等を歴任した人物である。

大正12年(1923)9月に発生した関東大震災直後に、再び内務大臣と帝都復興院総裁を兼任、東京復興計画を立案して復興事業に力を尽くし、現在の東京を形づくった。

前年の大正11年には、少年団日本連盟(ボーイスカウト)の初代総裁となり、各地で講演や視察を行って、地方における少年団の結成や育成に力を尽くす取り組みを始めており、晩年はライフワークの一つとなった。

「自治三訣」の書は、後藤新平が自治の精神こそは、国家の土臺石、社會の柱であり、その土臺石と柱とがしっかりして初めて健全なる文明が建立されるとの考えから、日本の子どもたちに自分の力で生きるための方法として、各地の講演で唱えたものである。

昭和2年(1927)5月8日、龍ヶ崎町青年会が主催した講演会のため、龍ヶ崎町を訪問しており、当時の集合写真が残されている。町内の大正座を会場に講演したのち、龍ヶ崎尋常高等小学校(現龍ヶ崎小学校)へも立ち寄り講演を行ったとされ、その際、「自治三訣」の書を同小学校に寄贈している。

この書の特筆すべき点としては、「自治三訣」の題名の下に花押が記されているところである。後藤新平が遺した「自治三訣」の書は数が少なく、その中でも花押が記されたものは珍しい。

矢口家長屋門、筆子塚

(所有者：矢口氏
所在地：龍ヶ崎市大留町)

1 長屋門

規模と構造形式は、間口17m余りの木造平屋建て、入母屋造り、瓦葺で、左右の部屋の正面は漆喰塗壁で腰が板張りとなっている。

外観としては、左側の部屋の下部(板張り)の一部が破損し、下塗りの土壁が崩れているところからは、竹で組まれた木舞などが見られる。板張り部分については、近年の補修箇所を除いて、和釘が打ちつけられているところが所々見られ、建築年代をうかがわせる。

所有者によれば、昭和40年代に屋根を瓦葺としたが、以前は茅葺であったとのことである。梁は元からの部材のようで、平刃の手斧で削られた跡が見られる。

左側の部屋は、19世紀後半、近隣の子どもたちに勉強を教えるために使用していたとのこと。さらに、梯子を登ると物を置くことのできる空間があり、明り取りが道路方向に設けられている。

かつて、この地域では水害が多発したことから、その備えとして家屋等の造りに工夫を凝らした家々が多かった。この長屋門の屋根裏部屋も、非常時に重要な物を運び入れる場所の一つとして使用したものと思われる。

次に右側の部屋は、自家消費する醤油、味噌を仕込む部屋として使用していたとのこと。現在も樽や大型の桶、酢を絞るフネと呼ばれる道具が内部に遺されている。さらに内部には大型の米粉乾燥機があり、部屋の半分近くを占めている。明治期以前は、使用人を住ませたとも聞いているとのことである。

2 筆子塚

矢口家では、幕末から明治にかけて長屋門の部屋で近隣の子どもたちに勉強を教えていたとされ、その教え子たちが恩師を慕って矢口家の敷地内に筆子塚(顕彰碑)を建立している。建立は明治14年(1881)であり、江戸時代後期、矢口家は幕臣三枝氏の所領の名主であったこと、帯刀を許されたこと、農業のほか酒造業を営んでいたこと、近郷近在の子弟数多に勉学を教えていたこと等々が石碑に刻まれている。